

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 波戸岡景太

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph.D.

副査 大阪大学大学院文学研究科准教授 石割隆喜 Ph.D.

副査 ネヴァダ大学リノ校大学院文学環境専攻教授
スコット・スロヴィック (Scott Slovic) Ph.D.

論文題目 “A Menagerie of Representations:

Thomas Pynchon’s Place between Postmodernism and Ecocriticism”

波戸岡景太君の本論文は、1960年代以降の現代アメリカ文学において最大の
前衛作家トマス・ピンチヨンのデビュー長篇 *V.*から代表作 *Gravity’s Rainbow*,
ひいては最新作の *Against the Day* までの全作品を対象に、1980年代以降のカル
チュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズム、さらにエコ・クリティシ
ズムの理論的成果を方法論として活用し、主として作品内の動物の表象に着目
することで、この高度に実験的な文学空間の核心へ迫り、独自性と説得力に満
ちた分析を展開してみせた、手堅く洞察にあふれる研究である。

本文各章は以下のように構成されている。

Introduction

Chapter 1

Do Pynchon’s Dogs Have Their Days?: The Return of Pynchon as a
Postmodern Ecologist

Chapter 2

Alligators Bleeding under the Street: Landscapes of Super-Conformism in *V.*

Chapter 3

The Sea around Them: Thoreau, Carson, and *The Crying of Lot 49*

Chapter 4

A Single Dodo and a Hundred Octopuses: The Environmental Reality in
Gravity’s Rainbow

Chapter 5

If Bugs Run Free: Representations of Colonized Nature in *Mason & Dixon*

Conclusion

Setting Free the Dogs: Looking Backward from *Against the Day*

Bibliography

論文の概要

本論文の出発点は、構造主義以降に普及したポストモダニズム系批評の理論に加えて、1990年代以降に本格化した環境文学批評(エコクリティシズム)の成果を取り入れることにより、これまであまり省みられてこなかったトマス・ピンチヨン作品における環境意識の表出とその変遷を、アメリカの環境史に寄り添いつつまとめなおし、そうすることで、人間と環境のあるべき「関係」をめぐってなされた文学実践の可能性を再検討していこうとするところにある。人間と世界の関係が環境問題というきわめて実際的なかたちで問題化されている現在において、現実と想像のはざまに位置する「表象」representationという概念を、作中の動物たちに注目して分析する方法論は、ピンチヨンという、戦後アメリカを代表しながらもメタフィクショナルな文学実験の側面からのみ論じられることの多かった作家が深層で抱く生態学的あるいは環境論的な世界観を、ポストモダニズムとエコクリティシズムとが融合する地点に見出すことで、現代アメリカ文学研究自体の新たな地平を拓くことを主たる目的とする。

第1章“Do Pynchon’s Dogs Have Their Days?: The Return of Pynchon as a Postmodern Ecologist”では、長編第4作 *Vineland* (1990)を中心に、人間とテクノロジーの間に存在する「犬」の表象に着目し、サイボーグ批評から「犬」批評へと、そのアプローチを変えた文化研究の巨匠ダナ・ハラウェイの *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness* (2003)を採用することで、人間と非人間のあいだにある「相互依存」(reciprocity)と呼ぶべき関係性を登場人物たちと「犬」との関係に見出す。

第2章“Alligators Bleeding under the Street: Landscapes of Super-Conformism in *V.*”では、長編デビュー作 *V.* (1963)を中心に、人間に対し極めて排他的なシステム(Super-Conformism)として増殖するハイウェイを一方の世界、地上の汚染が垂れ流される地下空間をその並行世界とする小説 *V.*の構造に着目し、そのなかで消費社会の象徴として描かれる「アリゲーター」たちと、それを狩る「アリゲーター・パトロール」のあいだに循環的な関係を想定する。この仮定より、小説 *V.*を、前章で論じた後期ピンチヨン作品の予告として再解釈し、ピンチヨン文学がそもそもの出発点からポストモダニズムとエコクリティシズムが折り重なる地点にあったことを明らかにした。

第3章“The Sea around Them: Thoreau, Carson, and *The Crying of Lot 49*”では、ジャック・デリダ的な言語実践にもっとも近いと目される *The Crying of Lot 49* (1966)を軸に、そこに見られるアメリカ自然文学の鼻祖ヘンリー・デイヴィッド・ソローと海洋生物学者レイチェル・カーソンの影響を探ることで、同作品が、小説 *V.*によって展開された Super-Conformism の風景をめぐる環境

思想の実践になりえていることを示した。作品中、女性主人公エディパが錯綜する意識のなかで耳にした、「フロリダの水族館に住むイルカ」とその救出をめぐるエピソードは、*The Crying of Lot 49*における環境思想の基盤が、開拓されつくした大地と無垢なる海という二項対立にあり、それは *Silent Spring* 以前のカーソンがこだわった「海」への信頼を反復するものであった。けれども一方でピンチオンは、海と大地の「エッジ」に位置するカリフォルニアの架空の都市を作品の舞台とすることで、そこにソロー以来のアメリカ市場経済と自然とのあいだに横たわる矛盾を描きだすことにも成功した。このような前提に立つなら、*The Crying of Lot 49* は、現代アメリカにおける環境意識の目覚めの時期そのものの葛藤を映し出す物語として、新たなアメリカ文学史的意義をもつ。

第4章 “A Single Dodo and a Hundred Octopuses: The Environmental Reality in *Gravity’s Rainbow*” は、前期ピンチオン文学の集大成であると同時に、ポストモダン文学の金字塔と目される *Gravity’s Rainbow* (1973) を、「自然環境のイメージ化」という行為そのものの寓話として読み直す。このとき、絶滅危惧種保護法の成立といった1970年代アメリカにおける環境意識の高まりが直接的に同小説やソクタグの写真論に影響を及ぼしていることを考慮し、ソクタグの提示する「イメージのエコロジー」というコンセプトが、*Gravity’s Rainbow* から派生するインターテクスチュアリティのなかで実現していることを示した。

第5章 “If Bugs Run Free: Representations of Colonized Nature in *Mason & Dixon*” は、ピンチオンの長編第5作 *Mason & Dixon* (1997) を中心に、小説内に描かれた「虫」の表象をポストコロニアリズムの視点を踏まえて分析する。18世紀のアフリカ大陸とアメリカ大陸の「自然」を結びつけるものとして登場する「虫」たちは、奴隷制に腐敗した一種のソドムとしてのケープタウンと、奴隷制が推し進められているアメリカの荒野とを修辞学的に連続させる役割を担う。同時に、「虫」という言葉を修飾する「アメリカの」という表現には、「虫」の主体性を奪うもう一つの修辞学的操作が行われており、こうした観点から本章は、同作品におけるピンチオンの自然描写が、描写すること自体にひそむ人間側の思惑を限りなく逆説的な手法によって提示することに成功しているのを実証していく。

結論部 “Setting Free the Dogs: Looking Backward from *Against the Day*” では、ピンチオンの現時点における最新作である長編第6作 *Against the Day* (2006) に登場する「犬」が、実は前作 *Mason & Dixon* に描かれた2匹のテリアの、さらなる「表象」として読解できることを提案し、後期ピンチオン作品における犬の系譜が、ポストモダンの時代における人間と非人間のエコロジカルな関係

そのものを「表象」していることを示す。

審査の要旨

波戸岡景太君の博士号請求論文に関して、審査委員会は 2008 年 1 月 26 日（土）の午前 10 時より、研究室棟にて 2 時間を超える口頭試問を行なった。その結果、審査員一同は、ピンチョンのポストモダン・エコロジーの鍵となるのが「表象」representation であるという前提にもとづく本論文が、現代人の環境論的現実と人間および非人間をめぐる想像力とのあいだに決定的な落差があること、にもかかわらずその落差を生産的に埋めるのにピンチョン文学が大いに有益であることについて、これまでのピンチョン研究のみならずアメリカ文学研究全体においても類例のない独創的な議論を「表象の動物園」なるテーマのもとに一貫して展開していることを、再確認した次第である。

以上の美点はいくら強調してもし過ぎではないものの、ただし「表象」という概念を用いるにあたっての細部の限界については言及しないわけにはいかない。審査員一同は、本論文の前提の面白さが、“high risk, high return”にあることを共通見解としたうえで、徹底的な理論的再検討に臨んだ。“high risk”の最たるものは、波戸岡論文が、人間を描くことを自明としてきた旧来の近現代文学の研究において、非人間を中心に置き換えていることである。万が一、非人間の視点を前景化してもなお、確固たる文学研究が成立し未来への展望を切り拓くのが保証されるとすれば、それ自体が大きな収穫すなわち“high return”につながるはずだ。さて、この賭けはどのていど成功したのか？

ピンチョンにおける“non-human representations”が、現実の環境とわれわれが「想像」する「生き物」（人間をも含む）との間の「落差」を埋めると論者は説明する (iv, 3)。ここで真っ先に浮かぶ疑問は、「生き物」に関してのわれわれの「想像」と「表象」はどう違うのかということだ。「生き物」を“imagination”の中に取り込み、そうして「想像可能」なものとして認識の枠を当てはめることは、「表象」することにほかなるまい。だとすれば、“representation”を“imagination”と対比させるよりは、ピンチョンの「表象」を、支配的な「想像 = 表象」に対する“counter-representation”として捉えた方がより正確なのではないか、という点をめぐって、まずは質疑がなされた。序論において、*Vineland* に登場する“The Black Dog”がその名を口にされないことによって氾濫するイメージの一つとして消費されることから免れている (“survive” [7]) ことを、論者は Susan Sontag を援用して “ecology of representations” (5) という観点から巧みに分析するが、この「表象のエコロジー」とは「対抗的表象」として理解されるべきものかもしれないからである。

以下各章を順に見ていけば、第 1 章で扱われる「ラッドライト」（反機械主義

者)について、波戸岡君はピンチョンの1984年発表のエッセイ“Is It O.K. to Be a Luddite?”がポストモダン・エコロジーへの重要な貢献であるという立場から分析する。この時、「ラッダイト」を通じてピンチョンが“humanity”(16)を回復しようとしているとの指摘がなされると同時に、タイトルにもなっている「ラッダイトやっていいかな?」という問いに対するピンチョンの答えが“ambiguous”(17)だと捉えられるのだが、ほんとうにそうか。「ラッダイト」でありながらコンピュータの可能性に惹かれるという点で「曖昧」であり愛憎入り交じる「心理葛藤劇」(“ambivalent”[20]; 副論文[34])ということなのだろうが、そうであれば、それはピンチョンの「ラッダイト」論の表層的な理解だと言わざるを得ない。なぜならピンチョンにとって、「ラッダイト」とはテクノロジー嫌悪及びその体現者を意味するというよりは、むしろより広く「困難な状況に立ち向かうデカくてワルいスーパーヒーロー」をこそ意味するからである(ゆえにネッド・ラッドは「頭のイカれた反テクノロジー主義者」ではなく「武道家タイプのワル」と再定義される)。本博士論文における「ラッダイト」論にはこの点が欠落している(ゆえに第2章でプロフェインが「生命なきモノ」との相性の悪さゆえに「ラッダイト」だとされているのは再考を要するだろう[72])。ピンチョンの「ラッダイト」論をエコロジーの議論(特にハラウェイの議論)と接続するために、その反「機械」的側面が戦略的に強調されたのだろうとは推測できるが、「スーパーヒーロー」としての「ラッダイト」と真っ正面から取り組んで、そこからポストモダン・エコロジーに斬り込むことはできないものか。

というのも、厳密なレフェリー制度を経て発表された『アメリカ研究』41号掲載の副論文「動物たちの困惑 トマス・ピンチョンのポストモダン・エコロジー」において、波戸岡君はジャーナリストの記事を参照してピンチョンと現代的ラッダイトとも言えるユナボマーとの類縁性を確認しつつ、そこからピンチョンの「動物表象」の問題へと議論をずらすことで、「ピンチョンはユナボマーにすぎないのか」(39)という問いに否定で答えようとしているからである。そもそも、ピンチョン文学の魅力は、このような、あまりにも単純で深みを欠き幼稚にすら見えるユナボマー的「思想」と共鳴してしまうことにある。ところが波戸岡君の議論の特徴は、ラッダイトをはじめユナボマーや「スーパーヒーロー」といった「薄っぺら」なものとピンチョンが交差することを回避しようとする姿勢にある。ピンチョン文学の特徴であるキャラクターの平板さ、「二次元性」(第4章でのコミック的オノマトペについての考察[129-30]はこれに直結する問題である)を考えるなら、「薄っぺらさ」が破壊力に転化する逆説的メカニズムをこそ考察しなければならず、ゆえにユナボマーを扱うにしても、こうした点から彼の「環境ラディズム」とピンチョンのポストモダ

ン・エコロジーの「危険な近さ」をもっと思索して欲しかった。

第2章の V. 論では、“conformism”と“super-conformism”の違いが論じられていることはわかるものの、その違いがなぜ“super-”という接頭辞で示されねばならないのか（なぜ他の接頭辞ではいけないのか）がいささか説明不足であると感じられる（加えて、本来は異なる概念であるはずの“conformism”と“super-conformism”の違いが次第に曖昧になり、ほとんど同義語のようになってしまっていないだろうか）。

第3章の *The Crying of Lot 49* 論の中で Rachel Carson の「ロマン主義」についての言及があるが（108）、この博士論文全体と「ロマン主義」との関係はいかなるものかという疑問は当然生じるだろう。エコ・クリティシズムと「ロマン主義」がそもそもどのような関係を切り結び、その中で本論がどのような位置づけにあるのか（ピンチョンは“romanticist”ではないとされているが [3]）を明らかにすることも必要であったかもしれない。

第4章の *Gravity's Rainbow* 論に関して言うなら、エコロジーという観点からこの作品を論じるのであれば、“lovable but scatterbrained Mother Nature”という作中の有名な一節をめぐる論を展開する必要があったのではないか。また、この章ではなく第1章で *Vineland* の Desmond と *Gravity's Rainbow* の「豚」が比較されているが（29ff）、なぜ同じ犬である実験用の犬を取り上げないのかがやはり疑問として残る（これらポインツマンの犬たちへの言及がなされている以上なおさらである [199] [副論文 29]）。

第5章では、“figuration,” “disfiguration” という語が用いられているが、これらと“representation”がどう違い、どう相互関連しあうものなのかについては、口頭試問でさらに深められた。また全体に、たとえば自然科学者にしてポストモダニズムの言説的準拠枠を受容する Daniel Botkin の 1991 年の著書 *Discordant Harmonies: a New Ecology for the Twenty-first Century* などが参照されていたら、さらに充実した論考が仕上がったろうとも指摘された。

以上を踏まえて最終的判断を述べる。波戸岡君の論文は、動物やエコロジーといった問題からピンチョンを読み直しながら、実は人間を中心化することなく、ピンチョンにおける主体の位置を再考察しているところに最大の強みがある。ポストモダンにおける「主体の死」という問題はありふれているが、そこに至る際に、今後はピンチョン作品における喜劇的フラット・キャラクターの視点をも導入すれば、「犬」、動物、エコロジーといった問題系がピンチョンにおけるポスト近代的主体論の帰結としてほとんど必然的に要請される様が、ますます明らかになるだろう。本博士論文は主に細部の煮詰め方に関して若干やり残した点はあるように見えるものの、逆にいえばそれは中心となるアイデアが、アメリカ文学研究の今後に対しても豊かな可能性を秘めていることの証

左にほかならず、ゆえに博士号の学位に充分値するものと判断する。
(1/26/2008)